



TITLE:

書評 Søren,Overgaard, Wittgenstein and Other Minds :
Rethinking Subjectivity and Intersubjectivity with
Wittgenstein, Levinas, and Husserl (Routledge, 2007,
viii+201p.)

AUTHOR(S):

坂井, 賢太郎

CITATION:

坂井, 賢太郎. 書評 Søren,Overgaard, Wittgenstein and Other Minds : Rethinking Subjectivity and Intersubjectivity with Wittgenstein, Levinas, and Husserl (Routledge, 2007, viii+201p.). 哲学論叢 2010, 37(別冊): S159-S162

ISSUE DATE:

2010

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/128966>

RIGHT:

書評

Søren Overgaard, *Wittgenstein and Other Minds: Rethinking Subjectivity and Intersubjectivity with Wittgenstein, Levinas, and Husserl* (Routledge, 2007, +201p.)

坂井賢太郎

本書の著者、ゼーレン・オーバーガールはハル大学で哲学講座を持つ若手の研究者であり、ヴィトゲンシュタインの他にレヴィナス、フッサールなどの現象学者を主に研究している。

本書の目的は、人の心的生活を、ものとは根本的に区別される側面を持つものとして理解することで、他者と他者の心の認識の問題に説明を与えようというものである。この問題を考えていく手引きとして、主に後期ヴィトゲンシュタインの哲学が用いられる。そして、レヴィナスやフッサール、ハイデガーやサルトルなどの「大陸系」哲学者の哲学と関連させながら議論は進められる。

他者の心の認識が難しい哲学的問題となるのは「他者の心はその人だけが特権的なアクセスをもつ領域であり私にとってアクセス不可能である」という考え方である。後期ヴィトゲンシュタインの思想はこれを批判する。そして、筆者はこの問題が他者の心をもっと同じように見ようとする「観察モデル (observational model)」に由来す

ると考える。他者の心とは「観察モデル」でとらえられるようなものではなく、他者が私たちに表出することで見る/わかる (see) ことができるものだ、つまり「表出モデル (expressive model)」で見るべきものだ、と筆者は考える。

本書の具体的な構造はこうである。

第1章ではある種の二元論と行動主義の問題点が挙げられる。ヴィトゲンシュタインの時代には他者の心の問題に対する説明は先の二つのいずれかであった。しかし、双方とも他者の心を、ものを観察するのと同じように考える点で問題含みなのである。筆者はこの点を詳しく説明する。筆者が用いているのはヴィトゲンシュタインの「カブトムシの箱」という思考実験である。概要を述べると各人が自分にしか見えない箱を持っていて、その中に入っているものをカブトムシと呼んでいる。このとき、私のカブトムシと他者のカブトムシが同じものである保証はあるのであろうか。このカブトムシが人の心と並行することは明らかだろう。この思考実験が示す通り、「観察モデル」では人の心を一般的に説明することはできない。しかしながら、我々は人に心があるということを疑わず日常生活を送っている。すなわち、「観察モデル」とは別のモデルで人の心を見ているのである。

第2章ではそのような他者の心をもっとどのように見る見かたが志向性を考慮に入れた際に、他者の心が得体のしれないものとなる理由について考える。それは、志向的な

心的現象がそれだけで自存する心的事項だと考えるからであり、そうすると志向的な現象に特有な「規準 (normativity)」を理解できなくなってしまうのである。

第3章では、自我あるいは心を非身体的に考えることが間違いであることが強調される。心が非身体的であり、心は身体に「住まう (inhibit)」と考えることは全く心をもつのように見ているのである。そうではなくて、身体を持つことは主観性を構成する一部なのである。

第4章では言語の外在主義と實在論を対比させながら、ヴィトゲンシュタインの私的言語の思考実験がどのような意味を持つかを検討する。

そして第5章では人の心は自身のみが特権的なアクセスを持つという考え方の代表的なものとして独我論を取り上げ、ヴィトゲンシュタインの枠組みの中でそれを批判する。つまり、私と他者の違い、すなわち一人称的パースペクティブと三人称的パースペクティブの本質的で根本的な非対称性は、「文法的な」違い、言語ゲームにおける言葉の使い方の違いに由来するのである。

第6章では、その非対称性の中で他者の心的生活がアクセス可能であるように思われることは、心の重要な側面を特徴づけていることが論じられる。これはサルトルおよび、ある読みでは、レヴィナスも論じていることである。それは、他者の心はもの見るようには知覚経験に表れえないということである。ここで筆者が主張するのは、

他者の心的生活の知覚的な表れが存在するという立場に立つことである。すなわち、他者の本当の表われとはフッサール、レヴィナスの言うところの「顔と顔が出会うこと」なのである。これを筆者はヴィトゲンシュタインの立場と関連させながら考える。

第7章では、他者の心的生活のアクセス可能性と他者の心の超越性の調停が試みられる。これは、ヴィトゲンシュタインとレヴィナスが述べるところの「表出」(特に人の顔における表出)を利用し、他者の心的生活はその顔にそしてその身体に「表出」されるものとして理解することで可能となる。つまり、他者の顔のあるいは身体の表出は知覚可能であり、それを心的生活だと理解すれば、アクセス可能である。他方で、その表出の源が他者であり、私ではないことが他者の他者性を示すので、他者の超越性も同時に担保するのである。そして筆者は、その表出が人が行っていると私たちが経験する根拠として他者の顔が放つ「光」を挙げるのである。

第8章で筆者は、レヴィナスに従い、その「表出」とその「原-倫理 (proto-ethical)」的な性質を結びつけ、ヴィトゲンシュタインと関連させながら論じる。筆者が考えるところでは、ヴィトゲンシュタインは我々が哲学をするとき、他者の心の認識を理論的なプロセスで「観察モデル」で考えがちであるがこれは我々の他者との関わりのモデルとして誤っているのである。ある他者の特徴的なふるまいがあり、私がそれに反

応する。これは、ある他者の特徴的なふるまいの意味を読み取って私が反応するというのではない。ある特徴的なふるまいに対し、私が反応する特定の仕方がまさに他者を認識することなのである。例えば、痛みを苦しむ他者を認識するとは、その痛みを取り除いてやろうと私が反応することなのである。この意味で、我々が他者を認識するとは、他者の「表出」を理解するとは本質的に我々が他者に倫理的な要求を提示されるということであり、「原-倫理」的な性格を持つのである。

第9章で以上の議論の結論が述べられる。すなわち、私は他者の心的生活にアクセス可能であり、かつ他者の心は超越している。このことを理解するためには、他者の心をもものように見る「観察モデル」を取る二元論と行動主義は成功しない。なぜなら前者は他者の心的生活へのアクセスを否定し、後者は他者の心の超越を否定するからである。これを調停するのが「表出モデル」なのである。すなわち、心的生活を身体的に「表出されている」と考えることで調停が可能になるのである。そして、そのように考えることで、他者認識の問題は認識論的・存在論的問題ではなく、倫理的問題となる。これが本書の結論である。

本稿の残りの部分では、本書において重要な位置を占める他者の心を見る/わかる際の二つのモデル、「観察モデル」と「表出モデル」、そしてそもそも他者を他者として認識する根拠となる「光」について紹介し

たい。

各章の紹介で述べたように、二元論と行動主義はともに「観察モデル」で他者の心を扱おうとする。しかし、これは1章の紹介で述べたように成功しない。

以下の議論の概要を先取りして述べると、私の心的生活と他者の心的生活は「文法的に」別のものである。ここから、他者の心的生活を端的にその表出として見る/わかる、すなわち「表出モデル」で見ることによって他者の心的生活へのアクセス可能性と他者の心の超越性が同時に説明できるのだ。

まず、他者の心的生活へアクセスできているという直観的な例としてヴィトゲンシュタインが挙げるのは、私が友人と打ち解けて話をしているとき、「彼の思考が隠れていてアクセスできない」と感じるようなことはないだろう、というものである。すなわち、ある条件のもとでは私は他者の心にアクセス可能なのだ。ではその条件とは何だろうか。

ヴィトゲンシュタインは「疑うことが無意味なところでは、知ることは適用を持たない」と主張する。例えば痛みである。私が痛みを持っている場合、私はどのようにそれを知ることができるのだろうか。私は端的に痛みをもっているのであり、それは疑うことはできない。従って、私は私が痛みを持っていることを知っているということは先の主張より無意味である。

他者の場合も同様である。他者が痛みを苦しんでいることを疑うことが無意味な場

合には、知るということは無意味であり、端的に痛みを持っているということは可能である。

このとき、まさに私は他者の心的生活にアクセスしているのである。確かに、私は他者の痛みを痛んであげることにはできないと言える。これは、私は私が痛みを持っているのとは別の仕方では他者の痛みを持っているのである。

この違いは文法的な違いである。私は私の心的生活を一人称的に持つ。私にとっての他者は、自身の心的生活を二人称あるいは三人称的に持つ。つまり、私が他者の痛みを痛んであげられないのは、同じ心的体験（ここでは痛み）に関して私と他者は文法的に別の心的体験を持っているのである。

もし、私が他者の痛みを痛んであげられた場合、その痛みは私のものであって他者のものではなくなるだろう。この意味で、この文法的差異は乗り越えることができない。これこそが、他者の超越性なのである。これが、他者の心的体験にアクセスしつつそれと同じものを持つことができないことの説明である。

次に、他者を他者として認識する根拠である「光」について説明する。この「光」がヴィトゲンシュタインとレヴィナスの接合点の一つである。

ヴィトゲンシュタインは人がある感情を持つことをその人の顔に見るとき、「反射した光 (reflected light) ではなく、それ自身が放つ光の中にその感情を見る/わかる」とい

う。

この言葉づかいはレヴィナスも共有している。「物質はそれ自身の光を持たない。それらは借りた光を反射するのだ」と言う。

筆者はこのことを次のように解釈する。ヴィトゲンシュタインとレヴィナスは、他者の心的生活はある程度、私の前に表れているのだと考える。つまり、他者は自身の心的生活を「表出」しながら生きている。この自身で表出しているということが物質との決定的な違いであり、「光」の源なのだ。

最後に、本書は本稿で紹介したように他者認識の問題についてヴィトゲンシュタインを手引きとして新しいモデルを提示しようとしたものである。他者認識の何が問題で、それはどのように乗り越えられるかを明確に示した点で私は本書を非常に価値のあるものだと思う。本書では、その他にも本稿で十分に触れることはできなかったが、「大陸系」哲学、主には現象学とヴィトゲンシュタインの哲学についても重要な示唆を与えている。私、他者、人そして言語と世界の関係についてヴィトゲンシュタインがどのように考えたかを丁寧に読み解き、その解釈と他の哲学を関連させてどこまで新しく面白いと言えるかに挑戦した本書は様々な関心を持つ人に満足を与える本であると思う。